

ナリト云ハザル可ラズ。之ヲ要スルニ九國條約ハ支那各地ニ於ケル支那人ガ其自由意思ニ依リ獨立國ヲ建設スルヲ禁ゼズ、從ツテ斯クノ如クシテ設ケラレタル新國家ヲ承認スルコトハ條約違反ヲ構成スルモノニ非ズ若シ滿洲國ニ日本及其他ノ諸國ガ公正ニシテ無阻碍ノ機會ヲ與フルニ於テハ同國ハ速カニ強力且ツ安定セル國家ニ發育シ、支那ニ強力且ツ安定セル政府成立ノ爲メニ、最モ必要ナル指導ヲ提供スベキヲ疑ハズ。

第十一章 滿洲事變ト國際聯盟 (四)

滿洲國承認

以上ニ依リ明ラカナルガ如ク、帝國政府ノ對滿洲國態度ハ極メテ直截ニ「リットン」卿初メ他ノ調査委員ニ通達サレタ。即チ帝國ノ滿洲國承認ハ既ニ不動ノ方針デ、殘ルハ單ニ其時期丈ケデアルガ、之モ頗ル差違ツテ居ルコトハ容易ニ看取セラレル、帝國政府ハ着々既定方針遂行ノ歩ヲ進メ、八月八日武藤大將ヲ關東軍司令官ニ補スルト同時ニ、滿洲派遣臨時特命全權大使ニ任ジ、其月二十日東京ヲ出發スル同大將ノ携行スベキ日滿議定書案ヲ十九日ノ閣議デ決定シタガ、臨時議會ハ二十二日ヨリ開カレ、二十五日内田外相ハ其施政演說中ニ滿洲國ノ承認ガ正當且ツ適法ナコトヲ詳述シタ。同外相ハ之ニ關シ在外使臣ニ電報シテ「此後モ此演說ノ「ライン」ニ依リ飽迄強硬ニ我方ノ立場ヲ主張シ置ク考ニテ、今更政府ニ於テ此趣旨ニ矛盾スル措置ニ出ヅル如キ事アラシカ、當ニ我方ノ對外的主張一貫セザル事トナリ、我方ノ足元ヲ見透サルル虞アルノミナラズ、内政上等ニモ意外ノ紛糾ヲ招來スベキニ付、出先ニ於テモ右趣旨ヲ體シ、此上トモ帝國ノ立場擁護方ニ付啓發其他萬遺憾ナキ様善處セラレタシ」ト訓令シタ。

斯クノ如キ事態ニ直面セル調査委員ガ、如何ナル心境デ東京ヲ立チ、又北京デ談議シツアルカハ、大凡ソ想像スルコトガ出來ル、從ツテ其報告書ガ我方ニ取り相當好都合ラシイト云フ今迄ノ觀測ハ裏切ラレテ來タ

ノデ、内田外相ハ調査委員會ノ權限ガ支那ノ全般的事態ニ關スル調査ニ止マリ、勸告ヲ提出スル任務ナキコトヲ、理事會決議其他ヲ引用シテ詳細吉田參與委員ヨリ同委員會ニ通達セシムルト同時ニ、武藤大將ノ使命ニ關シテモ情報ヲ與ヘタ。

調査委員會ノ報告書ハ九月四日北平ニ於テ各委員ニ依リ署名セラレ、而シテ日滿議定書ハ九月十五日調印サレタ、今カラ考ヘレバ姑息ナ取越苦勞デハ在ツタガ、聯盟脫退ノ決心ヲ促シタ四月五日ノ電報ニ對シテ大臣カラ何ノ返事モナイシ、最惡ノ場合ニ處スベキ日本ノ腹ガ果シテ何處迄据ツテ居ルノカ分ラヌノデ、出先ノ筆者トシテハ出來得ベクハ最後ノ行詰迄事態ヲ追込メヌ方ガ國家百年ノ良計デアル様ニ思ハレタカラ、今迄表示ヲ差控ヘテ居タ腹案ヲ、壽府滯在中ノ外務諸官ノミナラズ陸海軍武官ニモ打明ケ、八月十六七ノ兩日ニ亘リテ意見交換ノ末、左ノ電報ヲ内田外相ニ打ツタガ、之ニ對スル間接ノ返事ハ本章冒頭ニ掲ゲタ來電デア

ル。
吉田大使歸朝ノ途次當地立寄りノ機會ニ、佐藤大使其他關係諸官ト、滿洲問題ニ關シ篤ト協議ヲ重ネタルニ付、其梗概ヲ左ニ具申シ御考慮ニ供ス。

一、帝國ガ他國ト沒交渉ニ單獨ニテ滿洲國ヲ承認スルノ利害得失ハ、慎重ナル考究ヲ要スル問題ナリ、帝國ノ承認ニ依リ滿洲國ノ事態ヲ或程度迄安定セシムルノ効果ハ有之ベキモ、支那ハ直接間接ニ同國ノ治安靜謐ヲ攪亂スルノ策謀ヲ廻ラスベク、今ヨリ大凡ソ豫期シ得ル通り列強ハ我承認ニ追從セザルニ付、滿洲國民心ノ不安ハ依然繼續スベク、單獨承認ヲナシ拔差ナラヌ羽目ニ帝國ヲ置クノ對價ハ、極メテ輕微ナル

モノト云ハザルヲ得ズ、況ヤ幸ニ滿洲國發展シ、其國民ガ支那ニ往來シ、其貨物ガ支那ニ多量輸入セラルル氣運ニ向フモ、支那ノ策動容易ニ熄マズ「ボイコット」其他ノ障害絶エザルニ於テハ、滿洲國ノ將來ハ甚ダ寒心スベキ事態ニ置カルベシ、故ニ滿洲國ヲ守リ立テ飽ク迄其獨立ヲ援助セントスル帝國トシテ第一ニ考慮セザルベカラザル要點ハ、如何ニシテ支那ノ反滿政策ヲ除去シ、又如何ニシテ聯盟ヲ通シ列強ノ諒解ヲ取付クベキヤニ在リ、若シ之ガ爲メ例ヘバ或期間滿洲國ノ領土上ニ支那主權ノ存續ヲ認ムルモ、其實體ガ無害タルニ反シ前記ノ利益ヲ收得シ得ル見込アルニ於テハ、大局的見地ヨリ名ヲ捨テ實ヲ取ルノ方策ニ出ヅル方、遙ニ利益ナリト思考セラル。

二、以上ノ見地ヲ基礎トシ、具體案ヲ試ニ列舉スレバ概ネ左ノ通り。

(一)滿洲國ガ國際聯盟ノ一員トシテ之ニ加入ヲ許サザル迄、支那ハ滿洲國ノ領域ニ對シ從來通り其主權ヲ保有スルコト、但シ領域ニ於ケル主權ノ行使ハ、滿洲國ニ專屬スルコト。

支那ハ直接ノ方法タルト間接ノ手段タルト問ハズ、又其官憲ニ依ルト然ラザルトヲ論ゼズ、滿洲及其國民ニ對シ其權利々益ヲ害シ若ハ害セントスル一切ノ行爲ヲ爲サズ又之ヲ取締ルベキコト。

支那ガ前項ノ義務ニ違反シタル場合ニハ、第一項ノ規定ニ拘ラズ滿洲國領域ニ對スル其主權ヲ喪失スルコト。

(二)滿洲國ガ其發達ニ鑑ミ日本國ノ仲介ヲ經テ聯盟ニ加入ヲ要求セルトキハ、聯盟國ハ其加入ヲ容易ニスルタメ、之ニ充分ノ好意的考慮ヲ加フベキコト。

(三) 滿洲國ニ有益ニシテ且ツ其發達ヲ助長スル爲メ、日本ハ同國ト援助條約ヲ結び、行政財政軍事其他各般ノ助言及援助ヲ、滿洲國ノ自主權ヲ侵スコトナク與フベキコト。

三、前記(一)第一項ハ「セーヴル」條約第六十九條ヲ基礎トセルモノナレバ、莫佛伊等ハ之ガ不合理ヲ主張シ得ザルベク、(三)ハ英國ガ「イラク」ト結ベル一九二二年ノ條約第一條ニ則リタルモノナリ、尙ホ右以外ニ同條約第十五條ノ趣旨乃至支那ト諸外國トノ既存條約ノ尊重(滿洲國ノ發展ニ從ヒ是等條約ノ改訂要求權ヲ留保セバ更ニ可ナラン)門戶開放及機會均等ノ主義ヲ確認スルモ不可ナルベシ。

四、右ノ考案ハ專ラ一ニ述ベクル大局觀ニ基ケルモノナルカ、其結果ハ略ボ「クロードル」將軍ガ七月十二日貴大臣ニ對シテ開陳シクル意見ト合致シ、會々聯盟ニ對スル讓歩トモ見ラレ得ベキヤニ付「リットン」委員會ノ共鳴ヲ期待シ得ベキカト思ハル。

五、殘ル問題ハ是迄單獨承認ヲ高調シ來リシ帝國ガ、如何ニシテ其面目ヲ立テ、又輿論ヲ收拾シ得ルヤニ在ル處、調査委員會ノ報告提出後殊ニ論難ノ末妥協案トシテ本案ヲ提議スルニ於テハ、支那ハ勿論小國側ノ容喙多ク、此基礎ニ於テ本件ヲ纏メ得ル望ミ甚ダ稀少ナルベク、假リニ本案其儘ヲ成立セシメ得ル場合ニモ、帝國外交ノ失敗タルノ觀ヲ呈シ、我輿論ノ支持ヲ期待シ得ザルベキヲ恐ル、就テハ今ヨリ進ンデ委員會ト折衝シ、要スレバ其本國政府ノ諒解ヲ取付ケ、我方ノ提案ナリトシテ之ヲ報告書中ニ記入セシメ之ガ採用ヲ聯盟ニ推獎セシメ得ルニ於テハ、帝國ノ輿論モ之ヲ了トシ、又委員會モ其面子ヲ救ハルノ結果トナルベシ。

滿洲國ノ承認其他ニ關シ内田外相ガ當時知人ニ物語ツク中ノ左ノ一節ハ、同外相ノ心事ヲ赤裸々ニ表明スルモノト思フカラ、之ヲ掲ゲテ參考ニ供スル。

自分ガ滿鐵總裁在任中ニ滿洲事變勃發シ、親シク其實況ヲ見、軍部側其他ノ意嚮ヲモ看取シク結果、到底從來ノ儘デハ進ムコト難ク、寧ロ今日ハ日露戰役ノ後始末ヲ爲スベキ好機會デアルト直覺シ、當時歸京ノ砌リ各方面ニ自分ノ考ヲ話シクガ、其當時ノ考ハ今尙ホ變ル所ナク、現ニ同ジ考デ進ミツアル。又日本ニハ今日或一種ノ空氣ガ在ツテ、此空氣ニ世間一般ガ支配サレテ居ル様ニ見エル、從テ此空氣ニ正面衝突ヲシテモ何等得ル所ナク、無理ヲスルヨリハ寧ロ之ヲ徐ロニ善導シ、滿洲問題ノ解決ヲ期スルノガ最善ノ方策ト信ズル、而シテ此空氣ハ時ノ經過ニ依リ自然ニ落着クベキ所ニ落着クコトト考ヘ、自分ハ此見地カラ諸事ヲ處理シテ居ル。

滿洲國承認ノ是非ニ付テハ兎角ノ議論アルベキモ、今日ノ大勢並ニ從來ノ成行及支那ノ國民性ニ顧ミルニ中途半端ニテ後害ヲ殘スコト明カデアルカラ、承認斷行ノ外途ナシト確信シ、先ヅ議會演說ヲ公表シ、次デ之ヲ決行セル次第アル、其結果ニ付テ樂觀悲觀ノ兩說アルガ、自分ハ悲觀セヌ、所信ニ邁進スルコソ今日ニ善處スル所以ト信ズル。

「リットン」卿ニハ滿洲デ始メテ會談セシ時一應自分ノ意見ヲ述ベタガ、當時ハ勿論自分ノ今日外相クルベキコトヲ豫想シテノ話ニ非ズ、其後東京ニ於テ自分ガ外相トシテ同卿ニ面會セシ折ニモ、第一回ノ會談ニテ述ベタル自分ノ意見ヲ何等變更スル必要ヲ見ザリシノミナラズ、寧ロ言葉ヲ濁サズ率直ニ判然ト帝國政

府ノ立場ヲ了解セシメ置クコソ將來ノ爲メナリト考ヘ居リシガ、他ノ注意モアリ、或ハ當初ヨリ承認問題ニ觸ルコトヲ避クル方可然トモ考ヘ居タルニ「リットン」卿ハ冒頭直ニ承認問題ニ言及シタ爲メ、即座ニ明白且ツ率直ニ帝國政府ノ立場ヲ言明セシ次第デアル。

當時「リットン」卿トシテハ何等カ日支兩國ノ主張ヲ調和スベキ案ヲ腦中ニ描キテ、之ガ發表ニ都合ヨキ何等ノ暗示若クハ言質ヲ、自分ヨリ得度キ腹ナリシカト思ハルモ、自分ガ最モ明白ニ帝國政府ノ立場ヲ言明シテ他ヲ顧ミナカッタ爲メ、同卿ハ痛ク失望シクコトト思フ、其失望ノ結果多少ノ愚痴ヲコボシテ日本ヲ去ッタノデアル。

之ニ對スル支那ノ策動

帝國政府ガ九月十五日滿洲國トノ間ニ議定書ヲ締結シ、以テ同國ニ對シ正式ノ承認ヲ與ヘタコトヲ筆者ハ直ニ理事會議長ニ通告シ、議定書ノ英佛譯文及帝國政府ノ聲明ヲモ送附シタ、支那側デハ既ニ七月二十七日聯盟ニ對シ、日本ガ滿洲ニ大使派遣ヲ決定セルコト、此行動ハ傀儡政府ノ承認ト滿洲ヲ朝鮮ノ如ク併合スル道程ニ一步ヲ進ムルモノデアルカラ、特ニ聯盟ノ注意ヲ喚起スルト云フ公文ヲ送り、九月十日ニハ在本邦支那公使ヨリ、滿洲國承認ノ實行ハ自分ノ目的トスル日支親善ノ増進ニ非常ナ障害ヲ來タスカラ、承認ノ延期ハ出來マイカト内田外相ニ申入レタガ、同月十七日顏惠慶ハ聯盟ニ宛テ、日本ノ滿洲國承認ガ諸條約ニ違反スル國際的不信行爲ナルコトヲ責メ「スチムソン」ノ演說ヲ引用シテ、斯ル行爲ハ世界全體ノ關心スベキ事

項タルコトヲ述べ、承認ニ依リ日本ハ事實上「リットン」報告ヲ拒否セルモノトナシ、今ヤ問題ハ支那ノ領土保全ト政治的獨立トヲ確保スルヤ否ヤノ點ニ懸レリト云ヒ、報告提出ノ期限延長ニ關スル七月一日ノ總會決議ノ際議長ハ兩當事國ガ其間何等調査委員會ノ事業ヲ「コムプロマイズ」セヌコトヲ條件トシテ延長ニ同意セルコトヲ指摘シ、滿洲國承認ノ爲メニ新事態發生セル故、聯盟ノ措置ヲ促進シ、總會諸決議ヲ遵守サセル爲メニ必要ナル手段ヲ講ゼンコトヲ要請シク。右ト同時ニ支那ハ九國條約ノ調印國ニモ抗議書ヲ送ツタガ當時聯盟事務局ノ幹部デハ、日支事件殊ニ滿洲問題ハ全部一體トシテ考慮スルヲ要シ、承認問題丈ヲ引離シテ別ニ取扱フコトハ出來ヌ、從ツテ「リットン」報告ノ提出アル迄ハ何等ノ手續ヲモ取り難イト云フ空氣デアッタノデ、米國ヲ目標トシテ上記第二段ノ如キ策動ニ出タモノト思ハレル、何レニセヨ「スチムソン」國務卿ノ日支事件ニ對スル態度ガ常軌ヲ逸シテ居タコトハ周知ノ事實デ、議定書調印ニ刺戟サレタ彼ガ米國海軍ニ共同動作ヲ求メ「ブラット」提督ニ一蹴サレタノハ後世迄ノ笑話デアル。

列強ノ態度

當時伊太利デ靜餐中デ在ッタ米國ノ「リード」上院議員ガ、九月中旬「サイモン」外相同席デ「マクドーナルド」首相ト會見シ、十九日ニハ巴里デ「エリオ」首相兼外相ノ午餐ニ臨ンダガ、此午餐會ニ付「ニユーヨーク」ヘラルド」ノ巴里版ガ左ノ記事ヲ掲載シタ爲メ世ノ視聽ヲ牽クニ至ツタ。

十九日「リード」ハ「エリオ」ト午餐ノ際、獨逸ノ軍備問題ニ關スル英佛兩國ノ回答ヲ支持シ、米國ハ「ヴ

エルサイユ」條約ノ當事國ニ非ザルモ條約尊重ニ加擔スト云ヒ、滿洲問題ニ關シ米國ハ聯盟ヲ支持スベキニ付、聯盟ハ「スチムソン、ドクトリン」ヲ受諾スル様、佛國ニ斜旋方ヲ要求セリ、食後モ主トシテ滿洲問題論ゼラレタルカ、日本ノ滿洲國承認ノ結果米國側ニ於テハ大ニ憂慮シツツアリ。

内聞スルニ食後「リード」ヨリ滿洲問題ニ付米國ガ關心ヲ有スルコトヲ力説シ、佛國側ニテ米國ノ態度ヲ支持センコトヲ要望シ、其對價トシテ戰債問題ニ付佛國ニ便宜ヲ與フ旨ヲ説キタルガ「エリオ」ハ極メテ留保的ノ態度ヲ示シタトノコトデ、前記「ニューヨーク、ヘラルド」ノ記事ハ真相ニ近イモノラシイガ、之ニ關シ「エリオ」首相自ラ筆者ニ語ツタ所ニ依レバ「リード」トハ十九日ノミナラズ其赴英前ニモ面會シ、極東問題ニモ觸レタガ、彼ニ對シ自分ハ其持論ヲ繰返シ、急忽ニ事ヲ荒立ツルノ不得策ナ所以ヲ力説シテ置イタトノコトデ、又二十三日壽府デ筆者ガ「サイモン」外相ト面談ノ際「サ」ハ自分ニ關スル限り過日「リード」數分間茶話ヲシタ丈ケデ「リ」トノ對話ニ付新聞ニ噂サレテ居ルコトハ、何等信ヲ措クノ要ナシト明言シ得ル旨ヲ述ベタ。何レニセヨ「エリオ」首相ノ日支事件對策案ハ第八章ノ終リニ書イタ通り、時ガ自ラ問題ヲ解決スルカラ、氣長ニ臨機善處スベキダト云フニ在ル、佛國トシテ當面ノ重大問題ハ對獨關係上「ヴェルサイユ」條約殊ニ其軍事條項ノ保全維持デアルシ、又安全保障問題ニ米國ヲ捲キ込デ之ヲ有利ニ解決スルニハ、夫ノ「スチムソン、ドクトリン」ニ共鳴スル必要ガアル「エリオ」ガ九月二十六日ヲ開カレタ聯盟ノ定時總會デ「完全ナル聯盟規約ノ尊重遵守（ル、バクト。リヤン、ク・ル・バクト。ツー、ル、バクト）」ヲ強調シタ所以ハ蓋シ茲ニアル、彼此綜合シテ氏ノ日支事件對策ガ相當苦慮ノ結果案出サレタモノトシテ我

々ハ氏ノ日佛親善維持ニ對スル努力ヲ認識セネバナラスト思フ。更ニ「サイモン」外相ハ滿洲國承認問題ニ關シ松平大使ニ對シテ、英國政府ハ「リットン」報告提出後慎重ニ之ヲ考究シタ上デナケレバ其態度ヲ決定スルコトガ出來スト述べ、又支那公使カラ九國條約ノ署名國トシテ英國ニモ日本今回ノ措置ヲ條約違反ト非議センコトヲ申入レタガ「サ」ハ之ニ對シ意思表示ヲ拒ムト同時ニ、先ヅ「リットン」報告ヲ研究スルノガ必要ダト答ヘタトノコトデ、聯盟事務局幹部ノ空氣ト符合シテ居ル。英佛ノ態度ガ斯クノ如クナリシ爲メカ否カハ知ラヌガ、九月二十日米國大統領ハ「リード」ガ滿洲問題ニ關シ既存條約ノ尊重ヲ主張スル米國ト、對獨關係ニ於テ「ヴェルサイユ」條約ノ尊重ニ重キヲ置ク英佛トハ、條約尊重ノ點ニ於テ共通ナルニ付、互ニ支援スベキ地位ニ在リト主張シタトノコトダガ、米國ハ「ヴェルサイユ」條約ニ署名シテ居ラスト聲明シ又二十二日ノ華府「アツソシエーラツド、プレス」ハ「リード」ノ地位ハ非公式ノモノダト國務當局ハ述ベテ居ルト報ジタ。

聯盟理事會ノ調査委員會報告書審查時期

調査委員ノ報告書ハ九月二十日頃壽府ニ到着ノ豫定デ、同報告書ノ内容ハ我方ノ希望ニ副ハズ、殊ニ其末尾ニハ前掲我方ノ反對ヲ無視シ、事件ノ解決條件及之ヲ基礎トスル勸告的結論ノ記載ガアリ、而シテ此條件ハ到底其儘帝國ノ受諾シ能ハヌモノダトノ暗示ヲ得タ内田外相ハ、九月八日筆者ニ電報シ、帝國政府ハ調査委員會報告書ノ交付ヲ受ケタ後充分慎重ナ研究ヲ遂ゲ、之ニ對スル意見書ヲ理事會ニ提出スル意嚮デアルカラ

理事會ハ此意見書ノ接到ヲ待ツテ報告書ノ審議ヲ始メルノガ當然デアル、政府トシテハ打合セノ爲メ筆者ノ歸朝ヲ希望スルガ、駐佛大使タル本務モアリ又時間節約ノ爲メニ、特ニ本邦ヨリ有力ナ人物ニ必要ノ訓示ヲ與ヘ意見書ヲ携行サセルカラ、其壽府着ヲ待ツテ理事會ニ臨ミタイ考デアルト述べ、理事會議長ニ申入ルベキ書翰案迄送ツテ來タ。然ルニ此書翰案中ニハ、理事會ニ提出セラルベキ調査委員ノ報告書ハ我方ノ意見書ヲ附スルコトナク他ノ聯盟國ニ通報セラレザルコト、新聞紙ノ不當ナ論争ヲ避クル爲メ我方意見書ノ添付ナク報告書ヲ新聞ニ發表セヌコト、ト云フ要求ガアル。曩ニ記シタ通り臨時總會及十九人委員會成立後「リットン」報告ノ審議權ハ右ノ機關ニ移ツタト空氣ガ濃厚デアツタノヲ漸ク理事會ノ方ニ引戻シタノダカラ、理事國ハ報告書ヲ入手シ得ルガ、十九人委員會ノ他ノ委員ハ之ヲ見ルコトヲ許サレヌト云フ如キ申入ヲ日本ガスレバ、我方ニ對スル反感ヲ増大シ無用ノ誤解ヲ起サセルノハ目ニ見ヘテ居ル、又新聞ヘノ公表差止ノ提議ガ日本カラサレタト判レバ、報告書ノ公表ヲ一日千秋ノ思待ツテ居ル新聞界ハ、我ニ對シテ如何ナル聲ヲ舉ゲルカモ知レヌ、其影響スル所頗ル寒心スベキモノガアル許リデナク、此二條件ニ關スル事柄ハ結局手續事項トシテ取扱ハレルト思フカラ、採否ハ多數決デ行ハレルモノト覺悟セネバナラス、此場合聯盟ノ機構乃至理事會ノ空氣等カラ推シテ、到底通過不可能デアル。仍テ筆者ハ反對意見ヲ電報シ、内田外相亦之ヲ採納シタカラ、九月十四日筆者ハ左ノ書翰ヲ理事會議長ニ送ツタ。

余ノ得タル情報ニ依レバ、一九三一年十二月十日ノ理事會決議ニ基キテ構成サレタル調査委員會ノ報告書ハ、利害關係兩國ニト同時ニ、他ノ理事國ニモ通報セラルベシトノコトナリ、余ノ政府ハ此重要ナル報告

書ヲ研究シ、又其意見書ヲ作成スルノ權能ガ、國際慣例ニ違ヒ同政府ニ留保セラレ、從ツテ右意見書ノ接受前理事會ガ報告書ノ審査ヲ爲サザルベキヲ確信ス、此必要事ニ考慮ニ加ヘザル討議ハ、決シテ好結果ヲ齎ラサザルノミナラズ、却テ遺憾ナル歸結ヲ招來センコトヲ恐ル。

日本國政府ハ事件ノ重要性ニ鑑ミ、報告書ヲ慎重研究シ、充分入念ニ意見書ヲ作成シタル上、有力ナル人物ニ必要ナル訓令ヲ授ケ、右意見書ヲ携帶シテ壽府ニ出張セシムル筈ナリ、故ニ其到着ヲ待チ、理事會ノ討議ハ開始セラルベキモノト思考ス。

此見地ヨリ余ハ政府ノ訓令ニ基キ貴下ニ左記二件ヲ要請スルノ光榮ヲ有ス。

(イ)調査委員會報告書ニ對スル意見書ヲ作成シ、之ヲ壽府ニ携行セシムル爲メ、最短六週ノ期間、即チ報告書ノ翻譯、研究、意見書作成ノ爲メノ四週間ト意見書携行ノ爲メ東京壽府間旅程ニ要スル二週間ヲ、日本國政府ニ與フルコト。此期間ハ同政府ガ報告書及全附屬書類ヲ入手セル日ヨリ起算セラルベキコト。

(ロ)理事會ハ日本國政府ノ意見書ヲ接受セル後ニ非ザレバ、報告書ノ審査ヲ開始セザルベキコト。

余ノ政府ハ日本壽府間ノ距離ニ鑑ミ、以上ノ要請ガ衡正ニシテ、貴下ニ依リ快諾セラルベキヲ確信ス。

余ハ日本國政府ノ要望ニ一致スル閣下ノ回答ヲ期待シ、玆ニ重ネテ閣下ニ對シ敬意ヲ表ス。

右ニ對シ「マトス」議長ハ九月十七日附テ「理事會議長ハ本件日本ノ要求ニ付決定ヲ爲ス權限ナキモノト思考スルニ付、次回理事會ニ於テ本件ヲ審議シ得ル爲メ、各理事ニ直ニ書翰ヲ配布スル様、事務總長ニ依頼セリ」ト回答シタ。

理事會ハ九月二十三日ヨリ開カレル豫定ダカラ、筆者ハ二十二日壽府ニ赴キ事務總長ニ面會、事前工作ニ着手シタ。即チ其前日二十一日ニ壽府ニ着イタ報告書ノ佛譯及印刷ノ完了次第、九月三十日頃之ヲ日支兩國並ニ理事國及其他ノ聯盟國ニ配布シ、早クモ十一月十七日成ル可クハ二十一日ヨリ理事會審査ヲ開始スルコトニ打合セタ。九月二十三日ノ理事會ハ最初秘密會、後チ公開、二十四日ノハ全部公開デアルガ、本件ハ二十四日ノ日程ノ最後ニ掲ゲラレタ、之ハ其日ノ理事會ガ午前十時カラ始マル故、最後ノ議題ヲ討議スルノハ既ニ午餐時ト成ルカラ、自然議論モ少ナクナルトノ考慮ニ基クモノデアルガ、正反對ノ利害關係ニ在ル支那代表顏惠慶ハ二十三日理事會ノ劈頭之ニ關シテ質問シ、議題ノ趣旨ガ或種ノ行動ヲモ包含シテ居ルナラバ、其急迫事態ニ鑑ミ速カニ處理シ得ル爲メ、之ヲ日程ノ初メニ置クノガ至當ダト述ベタ。議長ハ右ニ對シ今期ノ理事會ヲ取扱フベキ事ハ單ニ日本提出ノ報告書審査時期ノ問題丈ケデ、純然タル手續上ノ問題ニ過ギストアツサリ片付テシマツタ。

斯クノ如クシテ調査委員會報告書審査時期ノ問題ハ、九月二十四日理事會ノ最終ニ討議サレタ。此回ノ理事會議長ハ愛蘭ノ「デ、ヴァレラ」首相デ、同氏カラ「マトス」前議長宛筆者書翰ノ内容ヲ説明シ、日本ノ要求通り審査期日ヲ定ムレバ、規約第十二條第二項ノ期間ヲ延長シタ臨時總會七月一日決議中ニ、十九人委員會ハ本件報告ヲ十一月一日以前ニ審査シ得ルコトヲ期待ストアルノニ反シ、十一月中旬以後トナル次第ナルモ、吾人ハ日本ノ要求ニ十分ナル理由アリト思考スルノミナラズ、聯盟ノ世界性ニ鑑ミ、意見ヲ徹底セシムルニ十分ノ時日ヲ與フル必要モアルカラ、日本側ニ滿洲國承認ノ事實ナクバ、理事會ハ快ク延期ノ要求ヲ受

入レタコトト思フガ、日本ハ最近此承認ヲ爲シタノミナラズ、議定書ヲ締結シ、日支事件解決ニ障害ヲ來タスガ如キ措置ニ出タノハ遺憾デアル、然シ吾人ハ日支事件ガ當事國双方ノ死活ニ關スル重大問題ナルコトヲ十分了解スル故、此際各理事ガ日本ノ要求ヲ受諾センコトヲ期待ス、依テ若シ右受諾ニ主義上異存ガナケレバ、更ニ理事會ノ日取ニ付各理事ノ意見ヲ求ムベシトテ、先ヅ右主義ノ點ニ關シ意見ヲ求メタ。

筆者ハ日本要求ノ理由ハ十分議長宛書翰中ニ盡シテアル故、改メテ之ニ附ケ加フベキ事ハナイガ、日本ノ要求ハ專ラ實際上ノ必要ニ基イテ爲サレタモノデ、徒ニ本件報告書ノ審議ヲ遷延セントスルガ如キ何等ノ底意モナイコトハ、各理事ノ了解サレルコトト思フ、唯理事會ノ日取ヲ何日ト定ムベキヤノ技術上ノ問題ニ關シテハ、目下歐亞ノ交通連絡狀態ニ鑑ミ、餘リニ嚴格ナ日取ヲ決定セヌ様希望スル、尙ホ只今議長ハ滿洲國承認問題ニ言及サレタガ、日支問題ハ全部之ヲ一體トシテ論ズベキモノト信ズルカラ、此際本問題ニ付討論ニ入ルノヲ避ケルト應酬シタ。

次デ顏惠慶ハ日本國政府ガ「リットン」報告ニ對シ意見ヲ提出セントスル希望ハヨク了解スルガ、其爲メニ六週間ノ猶豫ヲ必要トストノ申出ハ不可解デアル、日本ハ整頓セル政府ヲ有シ、壽府ニハ充分ノ權限アル多人數ノ有力ナ代表部ヲ持ツテ居ルカラ、本國トノ打合セハ電信デ足ルベク、意見書提出ノ爲メニ態々使節ヲ派遣スル必要アリト云分ハ了解シ難イ、將又日本ガ其期間内ニ何等事態ヲ惡化スベキ措置ヲ執ラヌトノ確信ヲ持チ得ルナラ、斯カル申出モ審議ノ餘地ガアルガ、從來ノ經驗ハ總テ之ヲ裏切ツテ居ル、即チ日本ハ事件ノ解決ヲ遷延サセ、其間或ハ傀儡政府ヲ設ケ、或ハ支那ノ郵便、關稅、鹽稅ノ諸制度ヲ破壊シ、最近ニハ

熱河占領ノ野望ヲ抱キ、去ル十七日數百ノ兵ヲ山海關方面ニ送り、天津ニ於テモ騒亂ヲ煽動シテ居ル由、昨日本國政府カラ電報ニ接シタ、斯クノ如キ次第故支那ハ聯盟ガ速ニ報告書ノ審査ヲ開始センコトヲ希望スル又手續問題トシテ考フルモ、第十二條所定ノ六ヶ月ノ期間ハ夙ニ滿了シ、七月一日ノ總會ハ此期間ノ延長ヲ決議シタガ、之ハ嚴ニ必要ノ期間ヲ與ヘルコト及前例トナラヌコトヲ條件トスルモノデ、遅クモ十一月一日以前ニ審査ヲ開始スルコトヲ豫想シテ居ル、殊ニ右ノ延期ハ總會ガ決定シタモノデアルカラ、今回日本ノ申出モ亦總會デ審議スベキモノト思フ、總會ノ召集ハ理事會ノ何等干與スベキモノニ非ザルト共ニ、日支問題ガ既ニ理事會ノ手ヲ離レ總會ニ付託サレタ以上、理事會ハ「リットン」報告ヲ單ニ總會ニ通達スル丈ケデ、之ヲ審議スル權限ヲ持タヌ、以上ノ理由ニ基キ日本今回ノ要求ハ十九人委員會ニ之ヲ付託サレタイト提議シタ。

右ニ對シ議長ハ、支那理事ノ所謂七月一日總會決議ノ結果理事會ガ報告書審査期日延期ニ關スル權限ヲ有セズトノ論點ハ、其議論ノ根據ヲ疑ハザルヲ得ヌ、即チ調査委員會ハ客年十二月十日ノ理事會決議ニ依テ設ケラレ從ツテ其報告書ハ理事會宛ニ提出セラルベキモノデアル、故ニ之ガ審査ニ關スル凡ユル點ニ付理事會ハ權限ヲ持ツテ居ル、成程昭和七年二月十九日ノ理事會決議デ日支紛爭ハ總會ニ繫屬スルコトト成ツタガ、之ハ少シモ理事會ノ報告書受領ニ關スル權限ヲ滅却スルモノデハ無イ、總會繫屬ノ爲メ理事會ノ權限ニ或種ノ制限ガ加ヘラレタノハ明カデアルガ、報告書ヲ理事會デ審議スルノハ其一般權限上當然ノコトデ、此解釋ハ正ニ三月十一日ノ總會決議第三節第六項ニ理事會ハ總會ニ對シ意見ヲ附シテ回附ストアル趣旨ニモ適合ス

ト答ヘタ。

西班牙理事「マダリヤガ」大使ハ只今議長ヨリ決定的意見ヲ伺ツタガ、先刻日本理事所言ノ最後ノ點ニ付、卒直ニ云ヘバ之ハ甚ダ危險ヲ伴フ議論ダト云ハネバナラヌ、日支紛爭ニハ兩面アル、其一ハ紛爭ノ根本ニ關スルモノデ、其二ハ日本軍ガ鐵道附屬地以外ニ長ク駐屯スル事實デアル、此終リノ點ニ關シ日本代表ハ事變以來理事會デ屢々短期且ツ一時ノ現象デアルト述べタニ拘ラズ、今以テ右ノ事實ハ存在シテ居ル、第一ノ點ハ日支兩國ノミニ關係スル問題デアルガ、第二ノ點ハ一ノ國際問題トシテ當然聯盟乃至規約ノ關係スル問題換言スレバ日本對聯盟ノ問題デアル然ルニ日本ノ滿洲國承認ハ第二ノ點ニ屬スルモノデ聯盟規約トノ關係事項ニ外ナラヌ、右承認ハ時ノ經過ニ依ツテ發生シタルモノナル關係上、今次日本ノ要求シタル審査時期ノ延長ハ、甚ダ危險ヲ包藏スルコト支那理事所言ノ通りニシテ、延期ハ必ズヤ更ニ事態惡化ノ結果ヲ招クモノト信ズル、仍テ自分ハ以上ノ所言ヲ留保シ日本ノ要求受諾ニ關スル議長ノ觀說ニ從フベシト述ブ。

筆者ハ之ニ對シ今日吾人ハ手續上ノ問題ノミヲ議シツツアルノダカラ、事件ノ根本ニ立入ル意思ヲ持タヌ、右ニ關シ錯覺ヲ有セラルル向アルハ頗ル遺憾ダト極メテ簡單ニ勿ネ付ケタ。顏惠慶ハ再ビ理事會無權限ノ主張ヲ繰返シ、議長之ヲ反駁セル後、理事會ハ主義上日本今次ノ延期要求ヲ受諾セル旨ヲ宣ス。次デ審査期日ニ付議長ハ十一月二十一日ヲ提議シタガ、支那ハ十二日ヲ主張シ、結局成ルベク十一月十四日ニ開催スベキモ、日本意見書ノ壽府着ガ不可抗力ニ依リ遅延スルカ、又ハ理事會ガ特ニ意見書ノ研究ヲ必要トスル場合ニハ、右開催ヲ一週間遅延シ得ルコトニ議權マリ、斯クシテ筆者ガ事務總長ト打合セタ通り、理事會ハ事實上

十一月二十一日カラ審査ヲ始メルコトニ成ツタ。

前記ノ如ク理事會議長ハ其演說中滿洲國承認ニ關シテ遺憾ノ意ヲ表明シタ、議長ガ之ヲ加ヘタ經緯ヲ仄聞スルニ、承認直後支那側カラ提出シタ抗議ニ刺戟サレシ小國連ハ、瑞西ノ「モッタ」首魁トナリ、總會(十九人委員會)議長「イマンス」之ヲ支持シ、十九人委員會ヲ開催セントスル運動相當勢ヲ占メタガ、事務總長ハ間ヤナク「リットン」報告到着シ、其審査モ遠カラザルニ付テハ、此問題ヲ切り離シテ論議スベキニ非ズト強調シタ結果、漸ク彼等急進論者ヲ説得シタノダカラ、右ノ運動抑壓ニ對スル妥協處置トシテ、議長ノ陳述中ニ前記ノ遺憾表示ヲ組入レタノダトノコトダ、然シ之ヲ其儘聞流シ置クコトハ我方將來ノ立場上不得策デアルカラ、筆者ハ曾テ事務總長ノ述べタ意見ヲ其儘借用シテ、一言應酬シタガ「マダリアガノ」反駁ハ會々前記小國連ノ主張ヲ如實ニ開示シタモノデ、殊ニ其間ニ立チ主トシテ策動シタノガ彼デアルコトヲ表白シタニ過ヌ。

十月一日ノ十九人委員會

支那側ハ日滿議定書ノ調印直後其爲シタル運動ガ何等ノ成果ヲモ齎サズ、理事會ニ於ケル其主張亦簡單ニ蹴セラレタノニ業ヲ煮ヤシ、九月二十六日十九人委員會議長ニ書翰ヲ送り、理事會決議ヲ指摘セル後、十九人委員會ニ於テ規約第十二條報告提出期間延長ノ正確ナル日ヲ決定シ、且ツ此間日本ヲシテ事態ヲ擴大サセヌ爲メ必要ナル手段ヲ執ランコトヲ要求シタ。然シ既ニ理事會デ「リットン」報告審査手續ノ確定ヲ見タコ

トニモアリ、十九人委員會ガ今更ラ支那側ヲ満足セシムベキ措置ニ出ヅベシトモ思ハレヌカラ、我方ハ之ニ對シテ全然何等ノ處置ヲモ執ラナカツタガ、支那側ハ宣傳ノ爲メ十九人委員會ノ開催ヲ要求シタノダカラ、議事ノ公開ヲ主張シ、又其代表ヲ出席サセント欲シタ、其爲メ十月一日ノ同委員會ハ議事ヲ公開シタガ、支那側ハ出席ヲ許サレズ、大國ハ孰レモ代表代理ヲ列席セシメ、傍聽席モ寂寥裡ニ開始セラレ、殆ンド議長及「ベネシユ」ノ仕組ンダ筋書ノ通りニ進行シタ觀ガアル、右兩人ノ態度ハ此際飽迄事件ノ急激ナ展開ヲ避ケントスル様見受ケラル、之ニハ英佛兩國ノ動キガ與カツテ大ニ力アリシモノト思ハレル。何レニゼヨ十月一日ノ十九人委員會ニハ議長ノ開會理由披露ニ次デ「ベネシユ」ヨリ、委員會トシテハ理事會カラ成ルベク速ニ「リットン」報告ノ移牒ヲ受ケテ、從來ノ決議通りニ行動スレバ支那側ノ要求ニ合致スルト思フカラ、現在何等ノ決定ヲモ爲スヲ要セヌト述べ、議長之ニ賛意ヲ表セル後、七月一日總會決議ノ第二項ニ報告書ノ接受後云々トアル點、及三月十一日總會決議第三節第六項ニ理事會ハ意見ヲ附シテ必要ナル文書ヲ十九人委員會ニ移牒スベシトアル點ヲ指摘シ、十九人委員會トシテハ理事會ヨリ「リットン」報告ノ移牒ヲ受クル迄何等ノ決定ヲ爲シ得ヌコトヲ述べタル上、尤モ七月一日決議中ニハ十九人委員會ガ十一月一日以前ニ「リットン」報告ヲ審査スベキ旨ノ希望ヲ表明シ居ル處、此點ニ付テハ過日理事會議長モ述べタ通り、理事會ノ審議開始ガ十一月十四日以後トナル結果、實際上右希望達成セラレザル次第ナルヲ以テ、理事會ハ此等ノ點ヲモ考慮シ成ルベク速ニ必要ナル意見ヲ附シテ「リットン」報告ヲ總會ニ移牒スベク、十九人委員會トシテハ右移牒アラバ直ニ集合シ、規約第十二條ノ期間ヲ必要ナル最少限度ニ於テ決定シ、之ヲ總會ニ提議スルコトトシタ

シト述べ、更ニ支那側要求ノ第二點ニ付議長ハ、客年九月三十日ノ決議以來兩當事國ハ事態惡化防止ノ義務アリ、此義務ハ十二月十日ノ決議ニテ確認セラレ、又七月一日ノ臨時總會ニ際シ自分ヨリ之ニ關シ兩當事國ノ深甚ナル注意ヲ喚起セルガ、九月二十四日理事會ニ於テ議長ハ日本ノ滿洲國承認ニ付遺憾ノ意ヲ表明シタ十九人委員會モ亦理事會議長ト同様ノ感想ヲ表示シ、且ツ此際更ニ兩當事國ニ對シ事態惡化防止ヲ嚴肅ニ約束セシコトニ付注意ヲ喚起スト述べ。「チュエツク」、瑞典、瑞西各代表之ニ同感ヲ表シ、議長ハ委員會一致ノ意思表示傳達方法トシテ改メテ決議ヲ爲サス、本日ノ議事録ヲ日支兩代表ニ正式ニ送附スルコトトシタシト提議シ、斯クノ如ク決定ス。

以上ノ通り帝國ノ滿洲國承認ハ波瀾ナクシテ終リ、十九人委員會亦從來ノ激越態度ニ出ヅルコトナカリシハ主トシテ英佛兩國ノ和衷精神ト之ヲ體セル事務總長ノ暗躍ニ依ルモノデ、殊ニ十九人委員會ガ遺憾表示ノ決議ヲナサザリシコトハ、同委員會ノ空氣ニ鑑ミ頗ル異數ト見ルベク、此間ノ消息ヲ玩味シ筆者ハ努メテ刺戟行動ニ出ヅルヲ避ケタガ、之ヲ目シテ或ハ怯懦ト罵リ、或ハ無能ナリト誹謗スル聲ヲ聞イタノハ、返ス返スモ遺憾デ、殊ニ同僚代表中筆者ノ意中ヲ咀嚼シ得ヌ者ノアツタノハ誠ニ不本意千萬デアル。

第十二章 滿洲問題最後決定迄ノ空氣

國際聯盟第十三回定時總會

國際聯盟ノ第十三回定時總會ハ昭和七年九月二十六日カラ十月十七日迄開カレタ、然シ軍縮問題ハ別ニ審議サレテ居ルシ、日支事件ハ臨時總會ノ繫屬問題故、今回ノ定時總會ハ極メテ平凡デ、恒例デハ總會ノ初頭ニ一般討議ト稱シ各國ノ代表ガ順次ニ長廣舌ヲ振フノデアルガ、今回ハ希望者モ極メテ少ナク、支那ノ郭泰祺ハ此機會ヲ捉ヘ、日支事件ハ臨時總會デ審議サレテ居ルガ、定時總會デモ之ヲ默過シ得ヌト思フ、本件ハ議題ニハ無イガ一般討議デ之ヲ論ズルノハ何等差支ハナイ、本件ハ規約、不戰條約ヲ基礎トシテ判斷スルヲ要シ、殊ニ一月七日ノ米國々務卿ノ聲明及三月十一日總會決議ニ表明サレタ侵略行爲ニ基ク事態ノ不承認ノ原則ニ重要意義ヲ持タセネバナラヌ、ト煽動演說ヲシタガ、何等ノ反響ヲモ與ヘルコトハ出来ナカッタ。筆者ハ無論演說ハシナカッタ、總會ハ常ニ相當數ノ副議長ヲ選出スルコトニ成ツテ居ル、大國ノ代表者ハ皆副議長ニ選バレルノヲ例トシテ居ルガ、日本ト伊太利トハ各一度落選シタ、日本ノ場合ハ當方ノ指導宜シキヲ得ナカッタ結果、投票ガ林、石井兩代表ニ分カレテ入レラレタ爲メデ、單ナル技術的手抜カリニ過ギヌガ、伊太利ノ落選ハ夫ノ「コルフ」事件ノ在ツタ翌年ノ出来事デ、純然タル政治的反感ニ基クモノト看做ス外ハナイ、故ニ若シ日支事件折衝中ノ我國ニ對シ伊國ノ先例ヲ辿ル様ナコトガアレバ、我ハ之ヲ以テ聯盟ヨリノ